

「ついに」「とうとう」「ようやく」「やっと」についての一考察

——テキストマイニング手法と目視による分析を通して——

A Study of “tsuini”, “toutou”, “youyaku”, “yatto” through Text-Mining and Observation

Tomoko Harada
原田 朋子

要 旨

「ついに」「とうとう」「ようやく」「やっと」は類義語として度々扱われるが、本研究ではテキストマイニング手法と目視¹の両面から、多角的に分析を行い、且つ全体像を俯瞰した。その上で、「ついに」「とうとう」と「ようやく」「やっと」を二つのグループに分け、異同や互換性を明らかにした。

特に、高頻度のものだけでなく、各々がかかる共起表現を全て可視化²し、有意義な結果を得た。そして、これらの副詞がかかる用言の用法に関しては、テキストマイニングを用いた大量の用例数の分析から再現性の高い結論を導き出した。形態的考察では、いずれも現在（未来）、過去・完了の用言を伴うが、過去・完了とより結びつきやすく、「ようやく」「やっと」は否定形にかからないことが実証された。

意味的観点からは、4名の日本語母語話者で判定することで、1人の判定による語感の揺れを補った。事態の結着の最終局面か実現過程か、どちらを踏まえているかのみならず、「ようやく」「やっと」には時間性の他にも、空間や数量の限界レベルの意味を含有し得ることが認められ、「とうとう」は「ついに」よりマイナス傾向のコンテキストで使用されることがある等々の差異を明らかにした。

キーワード：副詞、時間性、類義語、テキストマイニング

1. はじめに

かつて筆者は、「ついに」「とうとう」「ようやく」「やっと」のような副詞の類義語

の異同を明らかにすることに取り組んだことがあるが、活字化を断念した経験がある。なぜなら、当時、意味的観点からの考察はある程度まで行き着いたものの、用法に関して言及し、断定するには、相当数の用例の採取が必要だと判断したからである。用例数が少なければ、証左に乏しく、推測、印象の域を出ず、実証されたとは言いがたいと考えたためである。副詞の研究は数多くあるが、未だ解明されていないところもあり、とりわけ用法に関しては今後も更なる分析が必要だと考えられる。「ついに」「とうとう」「ようやく」「やっと」についての先行研究においても、用法に関する記述は、意味に関する記述より少なく、分析対象の副詞が呼応する用言の形態的特徴、その副詞の機能などに言及するには、大量のデータが不可欠であると考えられる。且つ、抽出結果の高頻度のものに着目するばかりではなく、全体像を俯瞰する必要性がある。

さらに、近年、コンピュータを活用することにより、書き手の文体の特徴の抽出や識別などの研究が加速的に進んでいる。そういったコンピュータを活用した分析方法の一つにテキストマイニングがある。

金明哲 (2012)³において、テキストマイニングは、テキストから目的に応じて情報や知識を掘り出す方法と技術の総称であり、テキストを単語や文節などに分割する自然言語処理方法を介し、語句やモデリングしたパターンを集計し、データマイニングの手法で情報を掘り出すものであると述べられている。

小林雄一郎 (2010)⁴においても、テキストマイニングは、テキストデータをコンピュータで計量的に解析し、有益な情報を抽出するためのさまざまな手法の総称であるとされており、手作業でデータを解析することが極めて困難なものでも、テキストデータを統一的な視点から客観的に分析することが可能になると述べられている。

筆者も原田 (2019) において、テキストマイニングを用いた多変量解析により、目視では気づかないような多次元のことを可視化し、分析結果の再現性の確保の面からも、客観性のある分析を行った。

そこで、本稿においても、副詞の類義語「ついに」「とうとう」「ようやく」「やっと」の異同を明らかにすべく、テキストマイニング手法と目視による分析の両面からの考察を試みる。

2. 本稿における「ついに」「とうとう」「ようやく」「やっと」の定義

川端善明 (2000)⁵ は、通常考えられている情態副詞には、「すでに」「すぐに」「たくさん」のような時間性、数量性の意味を持つ語が少数ながら含まれているが、それらは、様態性の情態副詞とは異なり、いわゆる時の名詞や数詞とともに、一類の時間副詞・数量副詞として組織でき、それらと、陳述・程度副詞、指示副詞こそが副詞として限定されると述べている。

工藤浩 (1985)⁶ は、「とつぜん」「急に」「ふいに」「いきなり」は“前触れなしに”とか“意外に”、「やっと」「ようやく」「とうとう」「ついに」は、“苦労したあげく”といったような意味特徴をもち、純粹の時の副詞とは言いにくい、変化や行為の成立・実現までの時間量の極小と大を表わすとも見うるとしている。

本稿では、「ついに」「とうとう」「ようやく」「やっと」は、広義で言えば、川端善明 (2000) に述べられた時間副詞であるが、狭義の観点から、工藤浩 (1985) に倣い、時の副詞の中でも時間性以外のものを表しうる類と定義しておく。その上で、これらの副詞の時間性以外の意味にも着目し分析を試みる。

3. テキストマイニングによる用法に関する分析

3-1. 出現頻度による分析

分析対象は、国立国語研究所の「現代日本語書き言葉均衡コーパス」、「日本語話し言葉コーパス」及び「青空文庫」(1925年以降に生まれた作家の作品100冊)、「名大会話コーパス」(100会話)である。

「現代日本語書き言葉均衡コーパス」については、ジャンルから書籍・新聞を選択した。「青空文庫」と「名大会話コーパス」については、テキストマイニングによる分析を実行するにあたり、障害となる記号やルビや注釈等を削除(データクリーニング)した。その上で、金明哲氏によって開発されたMTMineR (Multilingual Text Miner with R) を用いて、テキストマイニングによる分析を行った。MTMineR は、テキスト型データを構造化して集計し、R⁷ を用いて統計的に分析するソフトウェアである。

「現代日本語書き言葉均衡コーパス」、「日本語話し言葉コーパス」、「青空文庫」(100冊)、「名大会話コーパス」(100会話)を対象に、「ついに」「とうとう」「ようやく」「やっと」を抽出した結果を表1に示す。

なお、対象とした上述のデータは各々抽出対象字数が異なっているため、10万字当たりの出現数を算出し、比較することとした。その結果を図1に示す。

また、「ついに」については「ついには」、「ようやく」については「ようやくに」「ようやくと」、「やっと」については「やっとこさ」「やっとこすところ」や、「やっとのこと」「やっとの思いで」や、述語として機能する「やっただ」なども含めたことを付記しておく。

表1 書き言葉と話し言葉における「ついに」「とうとう」「ようやく」「やっと」の総出現数

	書き言葉コーパス(書籍)		書き言葉コーパス(新聞)		日本語話し言葉コーパス	
	出現数	対象字数	出現数	対象字数	出現数	対象字数
ついに	1,302	28,552,283	27	1,370,233	66	7,576,046
とうとう	497	28,552,283	4	1,370,233	73	7,576,046
ようやく	1,679	28,552,283	43	1,370,233	112	7,576,046
やっと	1,229	28,552,283	39	1,370,233	398	7,576,046

	青空文庫		名大会話コーパス	
	出現数	対象字数	出現数	対象字数
ついに	155	4,591,159	1	1,392,117
とうとう	60	4,591,159	6	1,392,117
ようやく	177	4,591,159	9	1,392,117
やっと	183	4,591,159	98	1,392,117

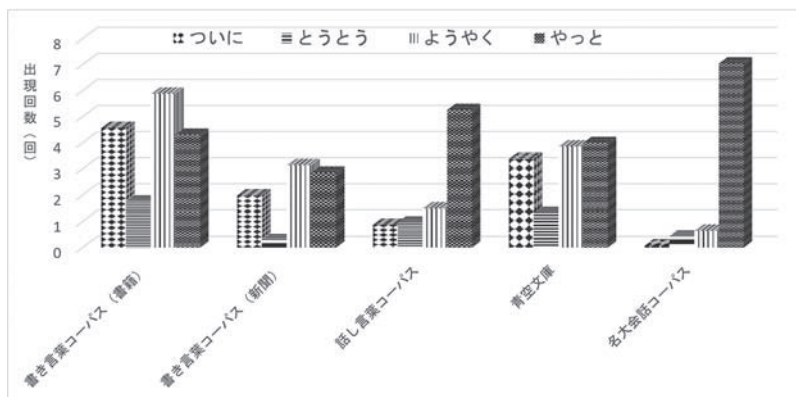


図1 10万字当たりの出現回数

図1から、「現代日本語書き言葉均衡コーパス」の書籍及び新聞や「青空文庫」のような書き言葉では、「ついに」は1.97～4.56回、「とうとう」は0.29～1.74回、「ようやく」は3.14～5.88回、「やっと」は2.85～4.30回出現しており、「とうとう」は「ついに」「ようやく」「やっと」と比べ、書き言葉での出現数が極めて少ないことが分かる。「ついに」「ようやく」「やっと」はいずれも出現回数が多いが、最もデータ量の多い「現代日本語書き言葉均衡コーパス」の書籍と新聞で見ると、「ようやく」が「ついに」「やっと」より多いことが分かる。

次に、「日本語話し言葉コーパス」や「名大会話コーパス」のような話し言葉では、「やっと」が5.25～7.04回と極端に多いことが判明した。「ついに」は0.07～0.87回、「とうとう」は0.43～0.96回、「ようやく」は0.65～1.48回であり、書き言葉の出現回数の傾向と大きく異なっていることが明らかになった。

「ついに」「とうとう」「ようやく」「やっと」の文体差については、「やっと」に比べて「ようやく」の方が幾分文章語的であり、また「とうとう」に比べると「ついに」の方が多少文章語的だと言われることが多々あるが、「やっと」は「ようやく」に比べて「日本語話し言葉コーパス」で約3.5倍、「名大会話コーパス」で約10倍出現しており、極めて口語的であると言える。また、「とうとう」に比べると「ついに」は「現代日本語書き言葉均衡コーパス」の書籍で約2.6倍、新聞で約6.8倍、「青空文庫」で約2.6倍出現しており、かなり文章語的であることを本分析で実証し、明確にした。

なお、「青空文庫」において出現した「ついに」は155例の内6例、「とうとう」は60例の内8例、「ようやく」は177例の内7例、「やっと」は183例の内18例が会話の中で使用されていたことを補足しておく。

3-2. 呼応する用言等の形態的特徴

「現代日本語書き言葉均衡コーパス」は対象語の前後の文字数単位での抽出しかできないが、一方で、「青空文庫」は文字数ではなく、文単位での抽出が可能である。対象語の前後のコンテキストを明示するには、「青空文庫」の方が適しているため、本節での分析対象は「青空文庫」(100冊)に絞った。

「青空文庫」100冊から抽出した「ついに」「とうとう」「ようやく」「やっと」が、現在(未来)、過去・完了、肯定/否定のどの形態にかかって使用されているか集計

したものを、図2のバブルチャートで示す。

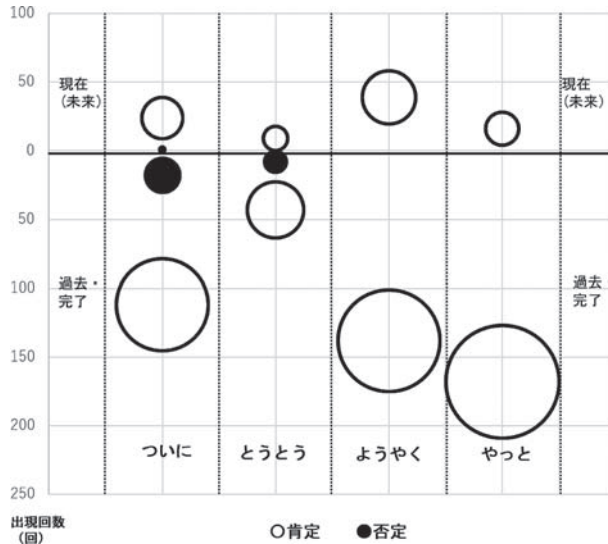


図2 呼応する用言の形態

図2から「ついに」「とうとう」「ようやく」「やっと」のいずれも総じて過去形を伴って使用されることが多いと言える。また、「ようやく」「やっと」は否定形とともに全く使われていないという結果が得られた。「ついに」「とうとう」に関しては、否定形を伴うものが認められるものの、肯定形と比べるとやや少ないことが判明した。

以上のことから、「ついに」「とうとう」「ようやく」「やっと」の間には、各々が呼応する用言の形態上の差が大きく見られることが分かった。

4. 共起表現に関する分析

4-1. 分析対象と分析方法

本章の分析では3-2と同様に「青空文庫」(100冊)を対象とした。

分析方法については、まず、「ついに」「とうとう」「ようやく」「やっと」を含む1文を文節解析ツール ibukiC⁸ にかけた。次に、これらの副詞が修飾している表現を抽出し、MTMineR を用いて Wordcloud 化した。

Wordcloud は、高頻度のものでなく、抽出された全ての共起表現を一覧できる

グラフである。また、文字の大きさと使用頻度が分かり、データが何十行にも及ぶ図表の場合であっても、全体的な使用傾向を瞬時に俯瞰することができるグラフである。つまり、大量のデータを分類・整理・縮約することで、データの全体像をつかみ、相関関係を多次元空間上に表すことができるのである。ただし、1文の中に動詞が二つ出てくる等、副詞が何にかかっているのか分からないものについては、全て目視作業で修飾関係を確認し、データの修正をした。

4-2. 「ついに」と共起する表現

本節では、「ついに」と共起する表現の種類と量を Wordcloud によって示した。その結果が図3である。Wordcloud 上の表現は、全て現在形に統一して表しているが、実際の例文中には過去・完了の形で出現する例が多く見られた。



図3 「ついに」との共起関係

図3が示すように、「ついに」は、「完成する／させる、卒業する、開始する」と多く共起し、「誕生する、登場する、突破する、発覚する、発見する、発展する」等のスル動詞も見受けられる。また、「奥さんになった」「世界第二位のコンピューターメーカーとなった」「自分一人となることであった」「自分だけになった」「カウボーイにはなりえなかった」「観光開発事業の攻撃目標になろうとしている」のような「～に／となる」とも多く共起していた。その他にも、「出来る」「来る」「言う」「こぎ着ける」「つかむ」「越える」「帰る」「見つける」「乗り出す」「追い込む」「踏み切

る」「得る」「戻る」等の動詞も多く確認できた。ちなみに、「ついに脱出決行の夜。」や「ついに人体に感染。」のような形態も見られた。

4-3. 「とうとう」と共起する表現

本節では、「とうとう」と共起する表現の種類と量を Wordcloud によって示した。その結果が図4である。Wordcloud 上の表現は、全て現在形に統一して表しているが、実際の例文中には過去・完了の形で出現する例が多く見られた。

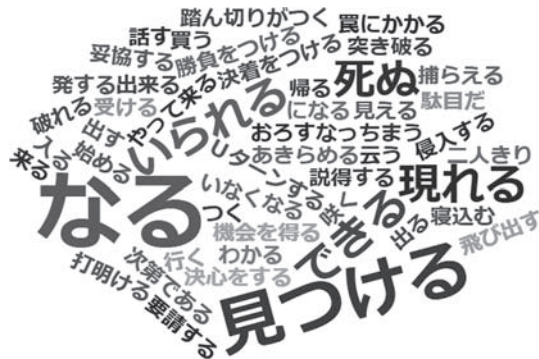


図4 「とうとう」との共起関係

図4の全体像から、「とうとう」は「説得する、決心する、侵入する、妥協する、要請する」等のスル動詞と多く共起しており、「415人になった」「ナンバーワンになった」「禁止の標識だらけになった」「物語の集大成を演じることとなった」のような「～に／となる」とも多く共起していることが分かった。その他にも、「見つける」「いられる」「現れる」「死ね」「出来る」等の動詞とも共起することが明らかになった。

4-4. 「ようやく」と共起する表現

本節では、「ようやく」と共起する表現の種類と量を Wordcloud によって示した。その結果が図5である。Wordcloud 上の表現は、全て現在形に統一して表しているが、実際の例文中には過去・完了の形で出現する例が多く見られた。



図5 「ようやく」との共起関係

「ようやく」は、図5の全体像から、「発表する、成立する、回復する、確認する、完成する、実現する、進化する、設立する、同意する、理解する」等のスル動詞と多く共起していることが分かった。次に、「気づく」も多く見られた。また、「読めるようになる」「1940年代末になってからのことである」「マシンが動く状態になる」「マグナ・カルタは法となった」「五千回転近くになろうとした時」「本になる事情は変わりはありませんでした」のような「～に／となる」とも多く共起していた。そして、「たどり着く」「出来る」「こぎ着ける」と比較的多く共起し、その他にも、「戻る」「出る／出す」「わかる」「見つける」「入る」「立ち着く」等の動詞も共起することが判明した。

4-5. 「やっと」と共起する表現

本節では、「やっと」と共起する表現の種類と量を Wordcloud によって示した。その結果が図6である。Wordcloud 上の表現は、全て現在形に統一して表しているが、実際の例文中には過去・完了の形で出現する例が多く見られた。

5-2. 調査結果

語感は人によって微妙に異なることが多々あるため、結果の中から、4名の評価が一致したものを抽出し、各副詞の総出現回数で除したものが図7である。

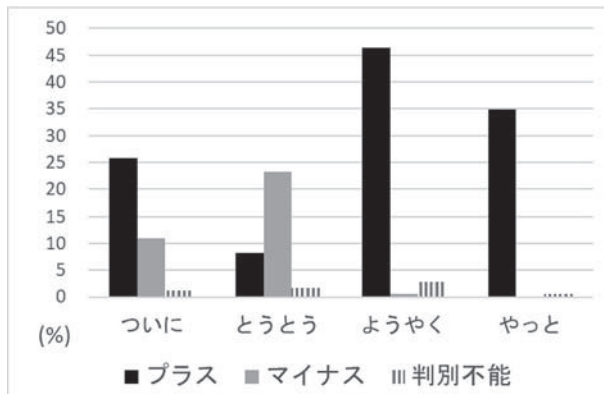


図7 プラスかマイナスかの判定

図7のとおり、「ついに」は、事態の結着に対してプラス傾向の意味を持つ文章中で使われているものが25.8%、同じくマイナス傾向の意味を持つ文章中で使われているものが11.0%であった。「とうとう」は、同じくプラス傾向の意味を持つ文章中で使われているものが8.3%、マイナス傾向の意味を持つ文章中で使われているものが23.3%であった。「ようやく」は、同じくプラス傾向の意味を持つ文章中で使われているものが46.3%と非常に多く、マイナス傾向の意味を持つ文章中で使われているものは0.6%とほぼ見られなかった。「やっと」も同じく、プラス傾向の意味を持つ文章中で使われているものが35.0%と非常に多く、マイナス傾向の意味を持つ文章中で使われているものは0%だった。

つまり、図7から、「ついに」「とうとう」を使用した場合、プラスとマイナスの両方の意味を表すものの、「ついに」は「とうとう」と比べるとプラス傾向、「とうとう」は「ついに」と比べるとマイナス傾向の意味の中で使用されることが明らかになった。また、「ようやく」と「やっと」を使用した場合、プラスの意味しか表さないとと言っても過言ではない。

「とうとう」に関して言及すると、用言が否定形であれば、マイナスの意味を表す

と安易に判断されることがあるが、形態的観点からだけでなく、コンテキストから意味的判断をして初めて、プラスの意味かマイナスの意味かに言及することが可能となる。たしかに、本稿 3-2 の結果では、「ようやく」と「やっと」が呼応する用言に否定形が見られず、本節でもマイナスの意味でほぼ使用されないことが確認できた。「ついに」についても 3-2 で肯定形がやや多く見られ、本節でも「ついに」はプラス傾向の意味を表すという結果になった。しかしながら、「とうとう」については、否定形に比べれば肯定形がやや多く伴なわれるにもかかわらず、本節では、マイナス傾向の意味で使用されているものが多々あることが明確になった。

つまり、形態的観点からのみで、プラスの意味であるか、マイナスの意味であるかを一概には判断できず、本節の分析には意義があったと考えられる。

6. 互換性に関する意味的考察

6-1. 調査対象と調査方法

調査対象は、前章と同様、「青空文庫」100冊から抽出した「ついに」155例、「とうとう」60例、「ようやく」177例、「やっと」183例の前後文脈を含む文章である。

調査方法も前章に引き続き、4人の日本語母語話者によって、本章では「ついに」は「とうとう」に、「とうとう」は「ついに」に置換可能か不可能か、及び「ようやく」は「やっと」に、「やっと」は「ようやく」に置換可能か不可能かを判定した。4名の判定が一致したのもののみを抽出して分析を行った。

6-2. 互換性に関する数的分析

置換可能か不可能かを数的に示したものが図8である。図8のとおり、「ついに」が「とうとう」に置換可能と判定されたものは29.0%、置換不可能と判定されたものが15.8%、「とうとう」が「ついに」に置換可能と判定されたものは31.7%、置換不可能と判定されたものが11.7%であった。また、「ようやく」が「やっと」に置換可能と判定されたものは69.5%、置換不可能と判定されたものが7.9%、「やっと」が「ようやく」に置換可能と判定されたものは73.2%、置換不可能と判定されたものが7.7%であった。

「ついに」「とうとう」間と「ようやく」「やっと」間の互換性を比べると、「ようやく」「やっと」間で置換可能と判定されたものは約7割と非常に多く、一方、置換不

可能なものについては「ついに」「とうとう」間の方が多いという結果が得られた。

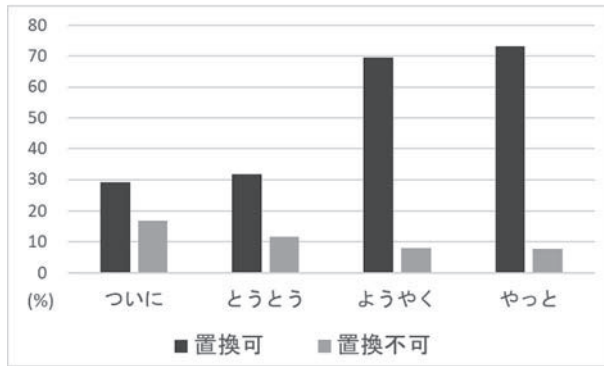


図8 4名の日本語母語話者の互換性の数的分析

6-3. 互換性に関する意味的分析

6-3-1. 「ついに」と「とうとう」の互換性に関する意味的分析

渡辺実 (2001)⁹には、「ついに」は、話手が、「Vかな、それとも非Vかな」と思っていて、「V」になったとわかったとき、「ついに」と言い、実現を待っているか否かにかかわりなく、事態が一方に結着したときに「ついに」と言い、逆の結着であっても、「ついに」を使うことは変わりなく、五分五分の緊張状態の持続、そして最終的な結着を表すと述べている。

また、『基礎日本語辞典』¹⁰には、「ついに」は成立しそうでなかなか成立しなかった行為や作用や、一定の時間的範囲の中で、成立または不成立に終わったことであると記されている。また、「とうとう」は「ついに」と近い意味を持ち、いろいろの過程を経て最後にその事態に至るという過程意識を踏まえ、また決意・覚悟・あきらめ・歓喜などの感情が強くにじみ出ると記されている。

本分析において、例文 (1) は「ついに」と「とうとう」が置換できると判断されたものである。

- (1) もうひとつは、ビーチボーイズの〈グッド・ヴァイブレイションズ〉が、異常な構造と、リズム・チェンジの多用、偏執的ハーモニーといった、ヒットをさまたげる要素を大量にかかえながら、先週、とうとうナンバーワンになった

ことだ。

(鶴岡雄二『45回転の夏』)

例文 (1) の場合は、「ついに」「とうとう」のどちらを使用しても、事態の実現を待っている意味になるが、両者には微妙なニュアンスの差異も感じられる。「ついに」を使用した場合には、作品がナンバーワンになったという事態の最終的な決着をより強く表しているように感じられる。一方で、「とうとう」の場合は、ナンバーワンになるという事態の実現に至るまでの妨げなどの過程に言及しているようである。

例文 (2) も「ついに」と「とうとう」が置換できると判定されたものである。

- (2) 「でも、その日は雨でね。はじめは小雨決行だなんて意気こんでたけど、だんだん本格的の降りになって、とうとうゴルフはお流れになっちゃった。……で、同じこの道を、僕は連中の車でいっしょに帰ることになった。」

(山川方夫『あるドライブ』)

例文 (2) の場合は、「ついに」「とうとう」のどちらを使用しても事態の実現を望んでいなかった意味になるが、例文 (2) にも両者には微妙なニュアンスの差異が感じられる。「ついに」を使用した場合には、ゴルフがお流れになったという事態の最終的な決着をより強く表しているように思われる。「とうとう」の場合は、小雨から本格的の降りになり、ゴルフがお流れになったというように、事態が段階的で、且つ残念な感情も強く読み取れる。

また、『基礎日本語辞典』¹¹によれば、「ついに」は、ある時期が来れば必ず成立する事態、「ついに冬になった」「朝になって、ついに目が覚めた」「ついに日が暮れた」「ついに高校を卒業した」のような文は、特別の前提がないかぎり成り立たないとされている。

例文 (3) では、第七章が「ついに夜が明けた。」から始まっているが、第六章のコンテキストから、夜が明けて大会に出場することに対して、身の奮い立つような緊張感をもって臨んでいたという前提があることが分かる。『基礎日本語辞典』の記述のとおり、例文 (3) では事態の成立に対して、特別の前提や思いがあることが確認できる。「とうとう」を使用した場合、「とうとう夜が明けた」のように大会出場の日を迎えたことに対する決意や覚悟の感情がさらに強くにじみ出る感がある。

- (3) 他の者にとって、この二人の行為は非難できるものではなく、それどころか一歩誤ればどうなるかわからない、この競技の危険度をひしひしと感じ、かえって身の奮い立つような緊張を覚えるのだった。

第七章 大会初出場

ついに夜が明けた。

(佐野良二『われらリフター』)

例文 (4) は、「ついに」が「とうとう」に置換できないと判定されたものである。『基礎日本語辞典』¹²には、「とうとう」は「まもなく→いよいよ→とうとう」と段階を追って事態の実現成立が時間的に迫り近づく表現であると記されている。とすれば、例文 (4) は段階的な過程意識がコンテキストから弱いと読み取れるため、「とうとう」と置換できないと判定されたのも納得できる。

- (4) 二人は、ジムを借りている義理もあって無下に断るわけにもいかず、ついに、一応行ってみることにした。知らない街で出場するのだから、恥をかいてもかき捨てだ、そういう気楽さもあった。(佐野良二『われらリフター』)

例文 (5) も「ついに」が「とうとう」に置換できないと判定されたものである。その理由として、この例文はニュースの中の言葉であり、「とうとう」を使うと、話し手の歡喜の感情がにじみ出てしまうため、ふさわしくないからではないかと考えられる。

つまり、事態の実現を待っているか否かに関わらず、「とうとう」は「ついに」より、話し手など表現主体の心理を表しやすい傾向があると思われる。

- (5) 朝のニュースは最初にワイメアの波の状況を伝えた。今日こそついに、この冬で最大の五十フィートを波はマークするだろう、とアナウンサーは興奮していた。(片岡義男『波乗りの島』)

例文 (6) は「とうとう」が「ついに」に置換できないと判定されたものである。「ついに」は最終的な決着を表すものだが、このコンテキストでは、今日に至るまでの過程に言及されており、今日に至ってもまだ嫁との事態が決着したとは言えない

め、「ついに」を使用し難いのだと思われる。また、5-2で「とうとう」は「ついに」と比べるとマイナス傾向の意味を含有すると述べた。したがって、このコンテキストでは「とうとう」の方が適しているものと考えられる。

(6) ここ二年間「いい加減にマニュアル読みなさいよ」とうるさがられるたびに嫁の背中に舌を出しつつ、とうとう今日に至っている次第である。

(富田倫生『青空のリスタート』)

例文 (7) は下線の「ついに」が「とうとう」に置換できないと判定されたものである。

(7) 肇は、通り過ぎざま、老婆が深々と頭を垂れて合掌するのを見た。(そんなにありがたく見えたのだろうか) と思った。それでも、余りの苦しさに笑うこともできなかった。(中略)

二日目は、目覚めると同時に全身の筋肉がきしんだ。全員が「うーむ」とか、「痛てえ」などと苦しげにうめきながら身を起こした。早朝練習のランニングでは、またもや婆さんに合掌をされた。驚いたことに婆さんは二人に増えている。(中略) 明日はお布施をいただけるかもしれないと思った。(中略)

六日目、ついに合宿打ち上げの日が来た。早朝ランニングの合掌する婆さんは、ついに十人を越えていた。しかし、残念なことにお布施はもらえなかった。(栗林元『自転車の夏』)

例文 (7) は、婆さんが現れるかどうかという事態の実現を待っているか否かではなく、婆さんが今日は何人現れるかという人数に焦点を置いており、予想以上の事態になったことを表している。また、婆さんの人数は多いことを話し手は期待していることが読み取れる。「とうとう」を使用すると、前提は婆さんに大勢来てほしくなかったという意味になってしまうので、例文 (7) の場合は「とうとう」を使用することができないと判定されたのではないだろうか。

例文 (7) のような場合は、例文 (7) と同様に、話し手が期待していた事態ではないが、予想以上の事態となったことを表し得る。

(7) 死者がとうとう 10人を上回ってしまった。

(筆者作例)

6-3-2. 「ようやく」と「やっと」の互換性に関する意味的分析

『基礎日本語辞典』¹³には、「ようやく」はなかなか実現の運びに至らない事柄が、ある時間経過の結果、しだいに実現へと傾き、ついに実現することであると記されている。また、「やっと」は困難な状況を克服し、どうにか実現する状態と記されている。

本分析において、例文(8)は「ようやく」と「やっと」が置換できると判定されたものである。

(8) 首都の空港から山岳地帯の曲がりくねった道を車で飛ばし、5時間掛けてようやく目的地の人里はなれた山間部にたどり着いた。(藤下真潮『イブ』)

例文(8)の場合は、「ようやく」「やっと」のどちらを使用しても苦労や困難を伴って待ち望んでいたことが実現したことを表している。しかし、両者には僅かなニュアンスの違いがある。「やっと」を使用した場合には、空港から目的地にたどり着いた安心感のようなものが感じられる。一方で、「ようやく」の場合、5時間も経過して目的地にたどり着いたというように、長い時間経過と段階を踏んでいることに感慨を覚えているように読み取れる。

例文(9)も「ようやく」と「やっと」が置換できると判定されたものである。

(9) 当時、村長はよく公用で福井県庁へ呼ばれた。それが冬だと、大野経由では行けない。まず檜峠を越えて北濃へ出、越美南線に乗り美濃太田で高山線に乗り継ぐ。次には岐阜で東海道本線に乗り替え、さらに米原で北陸本線に乗ってやっと福井にたどり着いた。

その経費が、年間出張旅費の四割を占めたという。かくて石徹白はその村名を捨てて白鳥町に属したが、その実現直前にもう一波瀾があった。

(浜野サトル『松平はるかさんのために』)

例文(9)の場合も、「ようやく」「やっと」のどちらを使用しても苦労や困難を伴っ

て待ち望んでいたことが実現したことを表している。しかし、例文 (9) には、石徹白から福井にたどり着くまでの苦労がとうとうと語られているものの、石徹白から福井までどのくらいの時間を要したかに触れられていない。よって、たどり着くまでの時間的経過よりも大きな苦労を伴って福井にたどり着いた時の安堵感が感じられ、「やっと」が使用されているのかもしれない。

「ようやく」と「やっと」は置換できるものが全体的に多いが、例文 (10) のように、例文 (8)、(9) と異なる意味が見られるものがある。『基礎日本語辞典』¹⁴ には、「ようやく」は時間的経過を経たうえで実現した場合に言うと言われているが、例文 (10) は時間的経過とは関係なく使用されており、乗用車が一台どうにか通れるくらいの幅であることを表している。つまり、空間的に限界にきている「ぎりぎり」の意味に近い。採取した「やっと」の用例には、このような例がさらに多く見られた。

- (10) 小さな駅前にはバスの発着所をかねているようだったが、広場から続く道は乗用車が一台ようやく通れるくらいの農道でとてもバスなど通れそうにない。
(石塚浩之『UV』)

『基礎日本語辞典』¹⁵ には、「やっと」の困難な状況として、時間的状況だけでなく、作業行為の状況、場面的状況、レベルにおける状況も挙げられており、その人の能力や、その場合に可能な、最大限の力を発揮して、このような状況を克服し、どうにか実現する意の記述もある。

例文 (11) で「やっと」は、この3人の能力を発揮して、これまでよりも良い状態になることを表している。

例文 (12) で「やっと」は、危うく足を踏みはずそうとした危険な状況下で、父ができる最大限の力を発揮して、両脇で体を支え危険な状況を克服しようとしている状態を表している。

例文 (13) の「やっと」は、限られた空間の中で、どうにかできる最低限の状態を表している。これは、先述の例文 (10) の意味に近い。

- (11) しかし、この三人体制でやっと効率的な作業のスタイルが確立したといっ
ていいだろう。私たちが読みあげるものを彼女は瞬く間にキーを打ってしまう

ので、作業はいままでの倍以上の早さではかどった。

(佐野良二『五味氏の宝物』)

- (12) ふいと慎作を見付けた父は、危く足を踏みはずそうとしたが、やっと両脇で体を支え、それでも微笑もうとした。が、笑えなかった。

(山本勝治『十姉妹』)

- (13) 私は二階の半坪の洋間に、本棚と机をいれてやっと椅子を動かすことが出来るだけの狭さを喜んでいた。

(久坂葉子『灰色の記憶』)

最後に、「やっと」を「ようやく」に置換できないと判定されたものは比較的多く見受けられたことを挙げておく。それは例文 (14)、(15) のような「やっと」が述語として機能する場合である。例文 (14)、(15) は「～するのが精一杯」という行為の困難さを表している。

- (14) 「勉強は好きなのかしら」

「好きともなんとも言えません」

「数学は？」

「ついていくのがやっとです」

「英語は？」

「右におなじです」

(片岡義男『七月の水玉だった』)

- (15) この素早い動きは、喧嘩慣れた者のやり方だ。そう認識するのがやっとだった。次々に男の蹴り上げる足の響きが体の芯にこたえる。

(山本 洋『メロディー』)

全体的に用例を見渡すと、事態の成立に時間的経過という意味の側面が弱まるほど「やっと」を「ようやく」に置換しづらくなる例が多かった。

加えて、「やっと」は時間的経過と関係ないものを表すものが「ようやく」よりも多く見られたが、先の例文 (10) のように、「ようやく」にも時間的経過と関係ない意味を表すものが確認できた。

改めて、「ようやく」と「やっと」は苦労や困難を伴って、ある程度の時間、待ち望んでいたことが実現する意味である際に類義語となることを記しておく。「ついに」

「とうとう」も言わずもがなのことだが、時間性の意味を持つ際に限って、類義語となり得る。

7. まとめ

「ついに」「とうとう」「ようやく」「やっと」について、明らかになった共通点や相違点を以下の表2に示す。

表2 「ついに」「とうとう」「ようやく」「やっと」の共通点と相違点

	ついに	とうとう	ようやく	やっと
共通する意味	ある事態（状態）の結着に、ある程度の時間がかかったことを表し、時間性的の意味を持つ時に類義語となる。			
呼応する用言のテンスと形態	過去・完了が多い。 肯定形も否定形もある。		過去・完了が多い。 否定形は見られない。	
文体差	「とうとう」より書き言葉の中でかなり多く使用される。	「ついに」より話し言葉の中でやや多く使用される。	書き言葉において多く使用される。	「ようやく」よりも話し言葉の中で著しく多く使用される。 一方で、書き言葉で使用される際に、「～するのがやっとだ。」のように、述語としてはたらくものが多く見られる。
意味的観点からの考察	事態の実現を待っているか否かに関わりなく、どちらか一方に結着した時に使用される。		事態の実現を待っており、その事態の結着に苦労や困難を伴い、事態が結着したことについて、プラスの意味で使用される。	
	「とうとう」と比べると、事態の最終局面にどう結着したかを表す傾向が認められる。	結着に至るまでの過程意識を踏まえている。「ついに」と比べ、事態の結着に対して、マイナスの意味合いを持つ傾向がある。	「やっと」と比べると、事態が結着するまで長い時間経過が、あることに意識を置いている。	「ようやく」と比べると、事態の結着について、安堵感などの感慨を表す傾向が認められる。
			時間性的の意味以外に空間・量について、限界レベルの意味を含有し得る。	
互換性	互換性はあまり高くない。		互換性が高い。 ただし、時間的経過という意味が弱まるほど「やっと」を「ようやく」に置換しづらい。	

共起表現	「～に／となる」 「完成する／させる」 「卒業する」「開始する」 「誕生する」「登場する」 「突破する」 「発覚する」「発見する」 「発展する」「出来る」 「来る」「言う」 「こぎ着ける」 「つかむ」「越える」 「帰る」「見つける」 「乗り出す」「追い込む」 「踏み切る」「得る」 「戻る」等	「～に／となる」 「説得する」「決心する」 「侵入する」「妥協する」 「要請する」「見つける」 「いられる」 「現れる」「死ぬ」 「出来る」等	「～に／となる」 「発表する」「成立する」 「回復する」「確認する」 「完成する」「実現する」 「進化する」 「設立する」「同意する」 「理解する」「気づく」 「こぎ着ける」 「たどり着く」 「出来る」 「戻る」 「出る／出す」 「わかる」 「見つける」 「入る」 「落ち着く」等	「～になる」 「言う」 「たどり着く」 「気づく」 「出来る」 「わかる」 「思い出す」 「来る」 「戻る」 「手に入る／入れる」 「確立する」 「完成する」 「獲得する」 「当選する」 「到着する」等
------	---	---	---	---

8. おわりに

以上、「ついに」「とうとう」「ようやく」「やっと」について分析し、前章の表2に考察結果をまとめた。その成果として、これまで明確に言及されていなかった互換性について、「ついに」と「とうとう」は互換性があまり高くないが、「ようやく」と「やっと」は互換性が高いことを本研究で明らかにした。また、「時間的経過」という側面が弱まるほど「やっと」から「ようやく」に置換しづらいことも見出した。

共起表現については、これまでに「ついに」「とうとう」「ようやく」「やっと」が「する」や「なる」と共起することは分かっていたが、とりわけ、スル動詞について、「何を」「どう」するのか、詳細な共起表現を本研究で明示した。そして、スル動詞など高頻度のものだけでなく、各々がかかる共起表現をすべて可視化することができた。

さらに、「やっと」に関しては、用言にかかる用法のみならず、書き言葉においては「～するのがやっとだ。」のように、述語としてはたらく用法が比較的多いことを発見した。このような場合には、「ついに」「とうとう」はもとより、「ようやく」には置換できないことも指摘した。

なお且つ、本研究では「ようやく」と「やっと」が空間・量について限界レベルの意味を含有し得ることを突きとめた。

しかしながら、本研究の中に、ごく少数だが、「ようやく」と「やっと」が置換不可能と判定されたものの、その理由が定かではないものが確認できた。これについて

は、現代語の用例だけでなく、近代、上代へと遡った史的研究を行わなければ明らかに出来ないと思われるが、これは今後の課題としたい。

注

- 1 目視とは、テキストマイニングが分析対象の文の中から調査項目に合致するものをコンピュータにより分類・抽出するのに対し、テキストマイニングになじまない分類・抽出作業を人の目により行うことを指す。例えば、本稿における目視の一例を挙げると、第5章において、テキストマイニングにより、抽出された対象の副詞を含む例文がプラスの意味であるのか、マイナスの意味であるのかの分析を行うに当たって、4人の日本語母語話者が、1文1文読み、判断を行ったが、この一連の作業が目視による分析である。
- 2 可視化とは、本来、人の目には見えない事象を、映像やグラフなどにして目で見て把握できるようにすることである。本稿では、Wordcloud やバブルチャート等を用い、対象語の共起関係や呼応する用言の形態について、多変量の情報を一望して俯瞰できるという意味で可視化という用語を使用している。
- 3 金明哲 (2012) p.27～10 行目
- 4 小林雄一郎 (2010) p.17 右側 2～8 行目
- 5 川端善明 (2000) p.1944 下段 23 行目～p.1945 上段 1 行目
- 6 工藤浩 (1985) p.56 上段 2～7 行目
- 7 R とは、ニュージーランドのオークランド大学統計学科の Ross Ihaka とアメリカのハーバード大学の生物統計学科の Robert Gentleman により開発が始められ、1997 年以降、多くの賛同者によって開発が続けられているオープンソース方式のデータ解析・処理の専用ソフトウェアのことである。詳しくは、金明哲 (2017) 『R によるデータサイエンス』を参照されたい。
- 8 ibukiC は、岐阜大学工学部応用情報学科の池田研究室で開発された、形態素解析だけでなく、係り受け構造を意識した文節単位と文節内の構造を分析するソフトウェアである。
- 9 渡辺実 (2001) p.193 14 行目～p.194 6 行目
- 10 『基礎日本語辞典』(1989) p.718 上段 34 行目、下段 8～9 行目、下段 13～14 行目

- 11 『基礎日本語辞典』(1989) p.717 下段 14～18 行目
- 12 『基礎日本語辞典』(1989) p.718 下段 7～8 行目
- 13 『基礎日本語辞典』(1989) p.1154 下段 9～11 行目
- 14 『基礎日本語辞典』(1989) p.1154 下段 8 行目
- 15 『基礎日本語辞典』(1989) p.1153 下段 8～13 行目

参考文献

- 石田基広 (2008) 『R によるテキストマイニング入門』 森北出版
- 石田基広・小林雄一郎 (2013) 『R で学ぶ日本語テキストマイニング』 ひつじ書房
- 川端善明 (2000) 「日本語の品詞一口語を中心に」『集英社 国語辞典』 第2 版, 森岡健二・徳川宗賢・川端善明・中村明・星野晃一, 集英社, pp.1944-1945.
- 金明哲 (2009) 『テキストデータの統計科学入門』 岩波書店
- 金明哲 (2012) 「コーパスとテキストマイニングとは」『コーパスとテキストマイニング』 石田基広・金明哲編著, 共立出版, pp.1-14.
- 金明哲 (2017) 『R によるデータサイエンス』 第2 版, 森北出版
- 工藤浩 (1985) 「日本語の文の時間表現」『言語生活』 403 号, 筑摩書房, pp.48-56.
- 工藤浩 (2016) 『副詞と文』, ひつじ書房, pp.222-223.
- 小林雄一郎 (2010) 『第 22 回「英検」研究助成報告』 財団法人日本英語検定協会
- 原田朋子 (2019) 「日本語母語話者と上級日本語学習者の小論文の比較ーテキストマイニング手法と目視による分析を通してー」『同志社大学 日本語・日本文化研究』 第 16 号, pp.1-15.
- 飛田良文・浅田秀子 (1994) 『現代副詞用法辞典』 東京堂出版
- 藤村逸子・大曾美恵子・大島ディヴィッド義和 (2011) 「会話コーパスの構築によるコミュニケーション研究」藤村逸子・滝沢直宏編『言語研究の技法：データの収集と分析』 ひつじ書房, pp.43-72.
- 森田良行 (1989) 『基礎日本語辞典』 角川書店
- 渡辺実 (2001) 『さすが！日本語』 筑摩書房, pp.193-197.

例文出典

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 国立国語研究所, 『現代日本語書き言葉

均衡コーパス』, <https://ccd.ninjal.ac.jp/bccwj/index.html>

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 国立国語研究所, 『日本語話し言葉コーパス』, <https://ccd.ninjal.ac.jp/csj/>

青空文庫, 『青空文庫』, <https://www.aozora.gr.jp/>

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 国立国語研究所, 『名大会話コーパス』, <https://mmsrv.ninjal.ac.jp/nucc/>